様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １３ 日現在

機関番号：１５２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ００１３４

研究課題名（和文）高木東六日記研究―1930年前後のパリにおける日本人の音楽留学と人的交流の実相―

研究課題名（英文）A study of Toroku Takagi's diaries: the life and personal network of a Japanese music student in Paris around 1930

研究代表者
藤井　浩基（Fujii, Koki）

島根大学・学術研究院教育学系・教授

研究者番号：５０３２２２１９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：　昭和から平成にかけて幅広い分野で活躍した音楽家の高木東六（1904-2006）が1928年12月から1931年12月にかけて書き留めていた、パリ留学時代の自筆の日記４冊分を翻刻し、解題を行った。
　高木は1928年12月から1932年3月までパリに留学し、ピアノと作曲を学んだ。日記には留学生活の様子が詳細に記述されている。高木の日記を通して、当時のパリにおける日本人の音楽留学と人的交流の実相の一端を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　2024年春，パリ・シテ大学において本研究成果を公開する機会を得た。また，2024年は高木東六生誕120年にあたり，国内外で高木への関心の高まりや再評価の試みがみられる。本研究がそれらのニーズに対して情報提供できれば幸いである。
　なお本研究成果は，令和６年度科学研究費助成事業研究成果公開促進費（学術図書）に採択され，『高木東六パリ音楽留学日記－1928年-1931年－』として刊行する予定である。

研究成果の概要（英文）：In this research project, I have reprinted and annotated four diaries handwritten by the Japanese composer Toroku Takagi (1904-2006) between December 1928 and December 1931 during his studies in Paris. Takagi was active from the Showa to Heisei periods not only as a composer for classical music but also as a multitalented musician. Takagi studied piano performance and composition in Paris between December 1928 and March 1932 . These diaries contain detailed descriptions of his life as an overseas student and his social life in Paris.

研究分野：音楽科教育学

キーワード：高木東六　パリ　日記　留学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９，Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究では，昭和から平成にかけて活躍した音楽家の高木東六（1904-2006）が 1928 年 12 月から 1931 年 12 月にかけて書き留めていた，パリ留学時代の自筆の日記４冊分（約 1400 頁）を翻刻し，解題を行った。

高木は 1928 年 12 月から 1932 年 3 月までパリに留学し，同地の音楽学校スコラ・カントルムでピアノと作曲を学んだ。日記は留学前の準備の過程からパリでの留学生活の終盤まで克明に記述されている。

1904 年生まれの高木東六は，2006 年に 102 歳で天寿を全うし，まさに 20 世紀を生き抜いた音楽家であった。昭和から平成にかけては，作曲家，ピアニストとして名を馳せる一方で，音楽番組の司会者や審査員などテレビ出演で茶の間にもよく知られた。また，文筆活動にも積極的で著書や雑誌への寄稿も多かった。

高木の没後，自宅の遺品から５冊の日記が遺族によって発見された。これらの日記は，パリ留学前の 1927 年から 1931 年までの５年間にわたり高木が書き留めていたもので，約 2000 頁に及ぶ。日記では，東京音楽学校の学生時代，パリ留学に至る経緯，留学生活や 1930 年前後のパリの音楽界の様子が実に生き生きと描写されている。戦前の高木の楽譜や資料の多くは戦災で焼失したが，奇跡的に残ったこれらの日記は，質・量ともに，大正末期から昭和初期にかけての日本の音楽史の一端を物語る，学術的価値のきわめて高い資料である。

研究代表者は，遺族から研究に役立ててほしいと日記を託された。研究代表者は生前の高木と親交があり，遺族とは現在も交流を続けている。すでに出版についても遺族の同意を得ており，科研基盤研究（C）の採択・交付を受けて，2019 年度より翻刻作業を開始した。

２．研究の目的

本研究の目的は，高木の日記の翻刻・解題を通して，次の３点について，従来にない知見を提示することである。

（１）日本人音楽留学生がみた 1930 年前後のパリ音楽界の実相

高木は当時のパリ音楽界の様子を詳細に記録している。ラヴェルやリヒャルト・シュトラウス，ラフマニノフらの実演に接した記述は読み応えがある。両大戦間期にあたる 1930 年前後のパリでは，多様な前衛芸術や大衆芸術が花開いていた。日本人留学生が肌で感じたパリの文化・芸術の動態，その後の日本への影響や日本のフランス文化受容について新たな知見を示す。

（２）同時期のパリにおける日本人留学生の学際的な交流の実態

日記に記された高木の交友関係からは，日本人留学生同士の交流やコミュニティのありようがわかる。言葉や経済的な問題を抱えながら，分野をこえて留学生が互いに支え合う様子が記されている。美術の島崎鶏二（島崎藤村二男），吉井淳二，浜口陽三，演劇の川島順平，ピアノの井口基成ら，帰国後に各分野の第一線で活躍する人物も含まれており，その後の日本への文化的な影響についても示唆を得ることができる。

（３）高木の音楽歴におけるパリ留学の位置付け

高木は日露戦争勃発の 1904 年にロシアに由来するハリストス正教会伝教師の家に生まれ，正教会の音楽に触れて育った。東京音楽学校中退後パリに留学し，帰国後，戦前・戦中・戦後にかけて，朝鮮・韓国を題材とした作品を手がけた。戦後は《水色のワルツ》等の流行歌で一世を風靡し，日本の高度経済成長期はテレビ出演等で人気を博した。

高木の音楽歴の背景には，ロシア，フランス，朝鮮・韓国等，20 世紀の日本の対外関係が色濃く反映されている。高木の音楽歴におけるパリ留学の位置付けと意味を考察する。

３．研究の方法

本研究では，何より日記の精読が不可欠であった。高木独特の癖のある手書き文字に慣れるために時間を要した。判読の難しい筆跡も多い。日本語では旧字体が多く，時折フランス語によるメモが筆記体で付記されている。記述の個々の内容，特に人名や出来事については，並行して文献や資料で裏付けていった。人名の表記は，姓，名のどちらかであったり，ニックネームであったりすることが多い。高木の交友関係を丹念に調べることで，意外な人脈が浮かび上がった。

高木は 80 歳を超えてから自伝『愛の夜想曲』(1985)を執筆，出版した。また，晩年のインタビュー等ではパリ留学について，記憶の誤りや若干誇張された内容が語られ，日記と整合しない点もある。このような齟齬についても，日記と照合し裏付けを取りながら，実相を明らかにした。

４．研究成果

（１）研究の主な成果

①パリ留学に至るまで

「大正十六年日記」は，大正天皇が大正 15 年 12 月末に崩御する直前に，翌年用として高木が購入していた日記である。実質的に，1927 年（昭和２）の日記となる。「大正十六年日記」および「昭和三年日記」の同年 12 月中旬までは，おもに東京音楽学校本科器楽科（ピアノ専攻）の学生生活が記述されている。当時，同校では学生による校長排斥運動が起き，新聞記事になるほどの騒動となった。高木はその中心的な学生として，1928 年（昭和３）に退学を余儀なくされた。この事件がきっかけで，高木はパリ留学を決意する。私費留学のため，親族を頼って留学資金の調達に奔走した。同時期，後に妻となる清子と婚約して日本を発った。

②昭和三年日記

高木は，1928 年 12 月 17 日に横浜港で日本郵船香取丸に乗船し，マルセイユに向けて出発した。「昭和三年日記」では， 出発４日前の 12 月 14 日から，「渡欧日記」と題して書き始め，出港日からマルセイユ到着直前の翌 1929 年（昭和４） １月 22 日までを，「香取丸船内生活日記 1928.12.17 より」として記した。全 416 頁中，半分の 223 頁が割かれており，かなり詳しい記述となっている。

横浜→神戸→門司→上海→香港→シンガポール→ペナン→コロンボ→アデン→スエズまでの航路に沿って，船内の様子，寄港地の印象や一時上陸中の観光の行程を記録している。橋本順光はその編著書『欧州航路の文化史　寄港地を読み解く』（2017，青弓社）で，明治後期以降，洋行者による「欧州航路の文学」が蓄積されてきたことを指摘した。高木の日記もまた，それらの一つに加えることができる可能性をもつと思われるほど，詳細なだけでなく，文学的な描写を随所に含んでいる。

さらに，高木の記述で特筆すべきは，音楽家の視点で船内の様子を記録している点である。高木は二等船室の乗客であったが，ピアノが弾けることから一等船室での催しにも参加できた。同乗していたメゾソプラノ歌手の佐藤美子とはサロンコンサートを行っている。また，船内や寄港地で耳にした歌や音楽の一節を楽譜として日記に書きとめている。

佐藤美子のほか， 船内の同室で生活を共にした，『満州事変秘史』の著者として知られる津田元徳，電気機械工学の大河内重助などとの意外な交流も読み応えがある。

③昭和四年日記

「昭和三年日記」の頁が尽きたため，マルセイユ到着の５日前から「昭和四年日記」に切り替えられた。1929 年１月 28 日にマルセイユを経て汽車でパリに移動した。パリでは，高木よりも早く留学していた東京音楽学校の同窓であるチェロの鈴木聡，バイオリンの林竜作らが当面の生活の世話をした。１ヶ月もすると，日本人のコミュニティに慣れ，交遊関係も拡がる。なかでも，大倉組パリ支社に勤務し，法律，絵，文学，音楽などに造詣が深く，のちに日本でアンフォルメル芸術運動を主導した鈴木崧とその家族と親しくなった。留学生活の開始当初は，住居と練習場所，ピアノの確保に苦労する様子が克明に記されている。

パリに到着して２ヶ月ほど経った頃，日本より父の訃報が届く。さらに，所持金も少なくなり，日本からの送金を待ち，友人からの借金でしのぐ日々が続く。肝心の音楽の修業については，パリ到着後にピアノの指導者をさがすところから始まり，鈴木崧の人脈をたどって，パリ国立音楽院ピアノ科教授のアルマン・フェルテに，個人レッスンを受けるようになった。

④昭和五年新日記

パリでの生活が１年経過し，交遊関係も一層多彩となった。日記からは高木の親しみやすい人柄から友人の輪が急速に拡がっていったことがうかがえる。特に美術の日本人留学生との交流が多くなる。島崎鶏二，吉井淳二，浜口陽三らである。その他，演劇の川島順平，法学の和泉盛輝とも親しくなり，分野をこえた学際的なサークルが出来上がっていた。この頃，最も親交が深かった友人は，画家の島崎鶏二である。島崎藤村の二男で，高木より３歳若く，少し遅れてパリに留学してきた。島崎鶏二との語らいの中で，鶏二が父・藤村について触れる場面も，高木は日記に書き残している。

ピアノを練習できるアパートや下宿に恵まれず，住まいを転々としてきた高木は，この年，ようやくパリ郊外のムードンに落ち着く。この下宿は島崎の紹介によるものであった。家主の老婦人は世話強く，母のように高木の生活を支えた。そのおかげで，ピアノの研鑽も軌道に乗ってくる。ピアノは，スコラ・カントルムのピアノ科教授であるポール・ブローに個人レッスンを受けるようになる。ブローの指導は厳しく，他の門下生の水準が高いため，レッスンではかなり苦しい思いをする。この時はスコラ・カントルムの正規生ではない。

島崎をはじめとした日本人留学生たちとの交遊も詳しく記述されている。当時芸術家のたまり場であったモンマルトルやモンパルナスで，連日連夜，ビリヤードやダンスといった娯楽に興じる様子も，若き芸術家ならではの留学生活の一端である。

聴きに行った演奏会の記録も興味深い。ラヴェル自身が指揮をした《ボレロ》，ラフマニノフのピアノリサイタル，リヒャルト・シュトラウス自身の指揮による自作の演奏会などが挙げられる。

⑤昭和六年自由日記

前年末には，やはり東京音楽学校の同窓生で，ピアノの井口基成がパリに留学してきた。井口

とは一緒にピアノの演奏会を聴きに行き，その模様を詳細に記述している。リストの高弟エミール・フォン・ザウアー，ワルター・ギーゼキング，アルトゥール・ルービンシュタインといった当代随一のピアニストらである。井口も自伝でそれらの演奏会に触れているが，高木の日記はより詳しい。

留学期間が残り１年半となり，時間を惜しむようにピアノの研鑽に励む様子がうかがえる。師のブローからも次第に認められるようになり，レッスンも落ち着き，レパートリーも格段に増えた。そしてこの年の秋，スコラ・カントルムの正規生として在学するようになった。

高木はパリで過ごす最後の夏休みを利用し，スイスを旅行する。レマン湖を船で移動し，モントルー，ローザンヌ，ジュネーブといった都市を周遊した。高木が留学中に期間，遠方に旅行をする機会は日記を解読する限り，この一回のみである。パリやその周辺の街や自然，天候を描写する高木の筆致はなかなかに文学的で味わいがあるが，スイスの旅行記はさらに細やかな情景や時間の移ろいが手に取るようにわかる。

「昭和六年自由日記」は，12 月 23 日までで記述が途絶えている。400 頁あるうち 385 頁で終わっており，他の４冊ではくまなく頁を埋めているだけに，やや意外な感じがする。また，自身で切り取った頁や切り抜いた箇所，行が，他の４冊よりも多い。発見された一連の日記は，これが最後であり，1932 年（昭和７）の留学最終盤から帰国までの日記はない。

（２）得られた成果の国内外における位置づけとインパクト，今後の展望など

2024 年（令和６）２月下旬から３月上旬にかけて，研究代表者はフランスのパリ・シテ大学より招聘され，本研究成果を公開する機会を得た。２月 28 日には，History of Contemporary East Asia : Sources, Methods, Objects というセミナーのシリーズの一環として，Japanese Composer Takagi Toroku's Diaries in Paris (1928-1931)：Musical and Cultural Experiences Handwritten by an Overseas Student と題し，英語による招待講演を行った。３月１日には，同大で開催された国際シンポジウム Circulations de la musique et de la voix entre la Corée et le Japon à l'époque moderne において，Toroku Takagi (1904-2006) : un compositeur fasciné par la musique et la culture coréennes dans les années 1930-1940 と題し，基調講演を行った（日本語による講演。フランス語逐次通訳付）。

2024 年は，高木東六の生誕 120 年にあたり，2026 年（令和８）は没後 20 年にあたる。ここ数年は，高木を回顧する企画や報道によって，高木への関心や再評価が高まるものと予想される。すでに，高木にゆかりのある各地では，記念の催しが計画されている。

2024 年３月１日には，NHK 松江放送局のニュースで，「高木東六 日記にセーヌ川と松江の情景重ね合わせる記述」と題し，本研究成果の内容が紹介された。研究代表者は資料提供を行うとともに，インタビューに応じた。
https://www3.nhk.or.jp/lnews/matsue/20240301/4030018418.html

2024 年 8 月 11 日には，長野県伊那市で，伊那市名誉市民 高木東六生誕 120 年記念事業「高木東六先生の功績」が予定され，研究代表者は「次代につなぐ音楽家・高木東六の遺産」と題して招待講演を行うことになっている。2024 年 9 月 1 日には，高木の出身地である鳥取県米子市で高木東六生誕 120 年記念事業として「朗読とピアノ・歌でつづる高木東六パリ留学日記」が予定されている。本研究成果である日記の翻刻の一部を，朗読を通して広く一般の来場者の方々に公開する。

2024 年夏には，パリでオリンピック・パラリンピックが開催され，国内外でパリ及びフランスへの関心が高まるものと思われる。本研究を通して，およそ 100 年前の日本とフランスの音楽をはじめとした諸分野での交流について，情報提供できれば幸いである。

なお，本研究の成果は，令和６年度科学研究費助成事業研究成果公開促進費（学術図書）に採択された。年度内に『高木東六パリ音楽留学日記―1928 年～1931 年―』として刊行する予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　2件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 藤井浩基
２．発表標題 高木東六のパリ留学日記 ―翻刻作業からみえてくる音楽家の実相―
３．学会等名 音楽学習学会　第18回研究発表大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 FUJII Koki
２．発表標題 Crossing Artistic Boundaries between Japan and Korea: The Korean Dance Work, “Tsuru” (Crane), in 1940 and 2016
３．学会等名 2021 International Colloquium “Japanese Colonialism and Music in Taiwan and Korea”（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 FUJII Koki
２．発表標題 Japanese Composer Takagi Toroku's Diaries in Paris (1928-1931)：Musical and Cultural Experiences Handwritten by an Overseas Student
３．学会等名 Universite Paris Cite CRCAO Seminar "History of Contemporary East Asia : Sources, Methods, Objects"（招待講演）
４．発表年 2024年

１．発表者名 FUJII Koki
２．発表標題 Toroku Takagi (1904-2006) : un compositeur fascine par la musique et la culture coreennes dans les annees 1930-1940
３．学会等名 Universite Paris Cite LCAO Symposium "Circulations de la musique et de la voix entre la Coree et le Japon a l’epoque moderne"（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2024年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関